

【特集】

IAML クラクフ大会報告

【目次】

2019 年クラクフ大会参加	伊藤真理 1
歴史を語るアーカイブズ	那須聡子 5
日本目録規則 2018 年版による音楽資料書誌情報 作成を考える	伊藤真理・鳥海恵司 8
臨時総会報告	11
事務局だより	12

2019 年クラクフ大会参加

伊藤 真理

(愛知淑徳大学、副支部長)

1. はじめに

このたび、伊東支部長の代理として 2019 年クラクフ大会に参加した。個人的には 2002 年のパークレー大会に初めて参加して以来、毎年難しいものの、自身の研究発表のために折々に参加してきた。しかしこれまでは、研究発表の時間以外は、興味関心の赴くままにセッションに参加したり、初めて訪問する街並みを散策したりと、かなり自由に振る舞っていた。今回は支部の代表としての責務を果たすため、気を引き締めて臨むこととなった。

毎年の歴代支部長による流麗かつ趣深い大会報告とはほど遠く恐縮だが、以下に支部代表者会議、総会、アドボカシー委員会の様子などを

記して、代表としての任に対する報告としたい。なお、総会報告や様々なセッションでの発表の一部、およびクラクフ大会の様子がよくわかる写真が本部の大会ウェブページ（注）に掲載されているので、併せて参照されたい。

2. 支部代表者会議

各支部からの代表者が一堂に集まって行われるセッションである。支部を持たない国からの参加もあり、今大会参加のある全支部が勢揃いするとなかなか壮観である。以下に、セッション中に話し合われたことから、気になる点をまとめた。

・Fontes Artis Musicae (FAM) 刊行形態の変更

既に当支部ニューズレター No.66 でもご報告しているが、機関誌 FAM がデジタル版刊行に移行する。個人会員は 66 巻 1 号まで印刷体を受け取るが、同巻 2 号からデジタル版のみとなる。印刷体を希望する場合は、別途申請が必要である。団体会員は、継続して印刷体が郵送されることとなっている。なおデジタル版は、本部ウェブサイトおよび人文社会科学分野のフルテキストデータベースである *Project MUSE* でアクセス可能である。デジタル版への移行に際し、最新号刊行の情報について本部のメーリングリストで配信することが提案され、検討されることになった。このように、個人会員と団体会員では

取り扱いが異なる。当支部は個人会員を中心としているので、特に注意が必要であろう。

・本部ウェブサイトコンテンツ

本部ウェブサイト内に E Library ページ設定することが検討された。当該ページでは、各支部が発信している情報を集約して会員に明示することにより、ワンポータルで情報を発見できることを目指している。

具体的な内容は、下記のとおりである。

・支部のニューズレター情報の掲載

本部のウェブページに情報を掲載するのではなく、各支部のウェブサイトリンクする。

・各支部をウェブ上で統合:コンタクト情報(電子メールアドレス、ニューズレターのページ、役員の写真など)

情報提供をする支部では、掲載されている情報が最新かどうかを確認すること、各支部の活動報告での写真・図を、テキストデータと分けて送付する(どこに挿入するかの場合を示しておく)ことが求められる。

・その他

・GDPR (General Data Protection Regulation)

2018 年 5 月から適用されている情報保護に関する法律で、ヨーロッパ内のみならずウェブ上での取り扱いに関し、国際的な影響があることは周知のとおりである。本部および支部での対応について、UK&Ireland 支部の尽力により、対応が示されていることが紹介された。

・2022 年大会開催候補地

総会でも報告されたが、2022 年開催国がまだ決定していない。当セッションで、オーストラリア、イタリア、カナダ、ノルウェーが検討中であると表明があった。

・公式言語の見直し

現在、英語、ドイツ語、フランス語が公式言語として使用されていることについて、たとえば国際音楽学会 (IMS) では、どの言語

でも良いと変わっている。また、各種翻訳ソフトの性能が高くなっており、便利になってきている。このような社会状況の変化を受け、どの言語も平等に扱うべきではないかという見直しについて、出席者に対し意見収集が行われた。ある出席者からは、公式言語を定めないことにしても良いが、各発表で英語による配布資料を準備する等の配慮がほしいなどの意見があった。筆者からは、ヨーロッパ言語については翻訳ソフトでの対応が進んでいるものの、アジア言語については未だ実用化が整っているとは言えず、やはりもう少し早く公式言語を遵守することが望ましいことを申し添えた。2 回目の総会報告で、引き続き検討することが述べられた。

・Strategic intentions 2019-21 について

本部執行部での戦略的な方向性を文書化したもので、各支部でのガイドラインになることが期待されている。

支部間の関係強化 (第 1 項目)、ウェブサイトや SNS の活用による IAML 自体の視覚化(第 2 項目)、音楽以外の団体との協力、著作権や目録など IAML が関わるべき分野を明確にする (第 3 項目)、歴史文書の収集、保存とデジタル化 (第 4 項目) などが盛り込まれている。



支部代表者会議



mentee らと筆者

3. クラクフ大会総会

大会期間中2回(7月16、19日)行われ、1回目は大会2日目の午後、2回目は最終日の最後のセッションとして設定されている。総会1回目では、昨年以降の動向と大会期間中の2回目の総会で審議を予定している案件の説明が行われる。

上述の通り議事録はすでに本部のウェブサイトに掲載されているので、詳細はそちらで確認できる。ここでは、当支部会員の関心が高いと思われる事項のみを箇条書きで記した。

・"International Day of Music Libraries and Archives"

1949年フィレンツェにて第1回の国際大会が開催された10月24日を音楽図書館の国際日として、UNESCOに申請中である。これは、音楽図書館およびアーカイブズが社会で重要な役割を担っていることについての認識を高めることを目的としている。

・会員動向

現時点の会員数は、1,500名弱で、近年会員数の減少傾向が見られる。財政的な大きな問題が起きないように、役員会では注視している。

・会費

2019 - 2021年度の会費は、据え置きである。その後、個人会員は43から44€、団体会員は72から74€に値上げとなる予定である。

・2019年選挙結果

概ねデジタル形式による投票で、353の有効件数があり、結果は以下の通り。2名の新役員が誕生した。

President-elect: Pia Shekhter

Vice-President: Jürgen Diet (Bayerische Staatsbibliothek, Munich, Germany)(1st term)

Vice-President: Jane Gottlieb (2nd term)

Vice-President: Anna Pensaert (Cambridge

University Library and the Pendlebury Library of Music, UK)(1st term)

Vice-President: Rupert Ridgewell (2nd term)

・Fontes Artis Musicae

編集長は引き続き Jim Cassaro氏が次期の2年間で担当することとなった。

・新規基金創設：旅費補助

The H. Robert Cohen / RIPM Fund for IAML Congress Travelが新設された。これは、既存のThe Liesbeth Hoedemaeker-Cohen Fundとほぼ同じ内容の補助となる。応募資格もほぼ同じだが、新設の基金では、出版、デジタル化やデータベースに関連している応募者が優先される。

・Development Committee 設置

資金調達を目的として設置が提案され、承認された。

・RISM C プロジェクトグループの設置

音楽アーカイブへのアクセスを目的としたプロジェクトグループの設置が提案され、RISM-Cとして活動することで、満場一致で承認された。Muscatを他の書誌データモデル等と整合性を持たせることへのニーズが背景となっており、3年間の活動計画が示されている。

・各セッションの報告

・クラクフ大会では、112件の口頭発表と、13件のポスター発表があった

・digitalIAMLの一環として行われた"unconference"は初めての試みだったが、好評だった。

・次回大会研究発表メッチは11月15日

・アーカイブズ臨時委員会

委員長 Jürgen Diet、本部役員、5会員で構成。活動自体は、IAML Archivistが不在の影響で進んでいなかった。なお同総会で、IAML Archivistに Joseph Hafnerが任命された。

・IAML Historian

Roger Flury氏の後任ポストは埋まらず、現在も立候補を受付中である。

・RISM Commission Mixte

Massimo Gentili-Tedeschi 氏退職に伴う退任の後任として、Barbara Wiermann 氏が選ばれた。

・大会開催予定

2020 年 7 月 21-24 日 プラハ

2021 年 南アフリカ Stellenbosch

2022 年 募集中

4. Advocacy Committee

当委員会には、伊東支部長が委員として参加していらっしゃる。7 月 15 日に開催されたセッションに、今回代理として出席した。一委員会の報告となるが、支部としての広報活動とも関連すると思われるため、ここで併せて報告したい。これについても当日の主な議題と概略を簡条書きで記す。

・ツイッター chat on music library など SNS の活用

・准専任図書館職員の基本的な資質要件についての、助言リスト作成

・Position statement 職務声明の作成

・戦略の進め方について

Outreach、Advocacy、Membership の各委員会の差別化の必要性

ちなみに、これら 3 つの委員会は下記の目的の下で活動している。

Outreach 委員会は、経済的に困難な会員への支援を目的としている。図書館資料の寄贈、大会参加補助などを支援する活動を行う。

Advocacy 委員会は、音楽図書館や音楽以外の関連組織に対して、音楽図書館、アーカイブズの重要性についての理解促進を目的とする。活動では、ツイッターでのプロフィール・ガイドライン・音楽図書館員とは、といったコンテンツの配信や、メンバー紹介等を計画している。

Membership 委員会は、協議会のなかで活動が目立たない地域に注目して会員の増加と多様化を図ることを目的としている。FAM 発行案内のメーリングリストの活用や、初回参加者をオ

ープニングセレモニーで紹介するなど、誰が参加しているのか参加者全体で分かるようにできたら良いのではないかという意見が出た。メンター制度も継続して行っている。

筆者は前支部長荒川恒子氏に教えていただき、Membership 委員会がコーディネートしている上述のメンターについて興味を持った。大会前に、だれが mentee なのかについて、委員会から連絡がある。大会期間中には、つきっきりで mentee の面倒を見ることはほとんどなく、委員会が設定している時間帯で担当することとなった mentee と会い、初参加者である mentee らが、少なくともだれかと知り合いになっておけるようにするという程度の役割である。筆者は、ライブツィヒ大会ではリヨンとベルリンの図書館員と、今回の大会では香港の大学図書館員のメンターを務めた。大会ではオープンセレモニーの前に初参加者のセッションがあり、私自身もとても参考になるような IAML に関する丁寧な説明がある。多くの参加者はしばしば同僚とともに行動するため、特に困ることも生じないようである。それゆえ、休憩時間に一緒にお茶を飲んだり、それぞれの国の事情を伺ったりと、この制度を通じて新しいメンバーとの交流を円滑にでき、メンターであるこちらの方が非常に有益と感じている。ただし、多くのメンター役は相手を探すのが一苦勞であるようである。筆者の場合は、事前にメールで連絡を取って自己紹介をしておき、お互いを見つけやすいようにしている。

5. おわりに

今大会でも毎夜ポーランドにちなんだ趣向を凝らした演奏会がクラクフ市内の各所で催された。初日はオープニングセレモニーでの古楽アンサンブル、二日目はアッシジの聖フランシスコ教会でのロマン派時代のピアノ五重奏曲、三日目は聖アン教会での 16 ～ 17 世紀のオルガン

タブラチュアによる作品をまじえたオルガン演奏、エクスカージョンの中日を挟んで五日目はクラクフ市と IAML 共催として行われた Festival of Polish Music の演奏会で、近代の室内楽だった。いずれの演奏会でもポーランドの作品が盛り込まれ、当地の豊かな音楽文化を知る良い機会となった。

近年は、スマートフォンのアプリを使って大会プログラムの確認やスケジュールなどを管理できるようになっており、インターネットにアクセスできる状況であれば、大会期間中は大変便利である。今大会ではまた、全日昼食付きだったことが参加者には大変好評だった。毎日ランチをどこで取るかなど気にする必要がなく、ランチ時間を使って打ち合わせをすることも可能である。セッションの合間のティータイムとともに、大会参加者が落ち着くことのできる和やかな雰囲気作りにも役立ったように思う。

最後に感傷的な感想をひとつ。今大会の最終日ディナーは、日が暮れなすむ中を小一時間かけてバスで移動して、クラクフ市街にある the Royal Castle in Niepołomice で開催された。Hrabia 会長の挨拶では、当会場を推したのは Hrabia 夫人だそうである。今大会が大成功であったのは、大会委員らの懸命な努力の賜であり、それとともに現会長のお人柄を核としたポーランド支部と会長を支える家族の結束力を実感した次第である。

注

クラクフ大会 . 2019 IAML Congress, Kraków, Poland. <https://www.iaml.info/congresses/2019-krakow> (2019-11-24 閲覧)

総会報告 : IAML General Assembly 2019, Kraków – Minutes. https://www.iaml.info/sites/default/files/pdf/2019_krakow_general_assembly_minutes.pdf (2019-11-24 閲覧)

(いとうまり)

歴史を物語るアーカイブズ

那須 聡子

1. はじめに

1.1 参加への動機

本稿は、2019年7月15日から19日にかけてポーランド南部の都市クラクフ Kraków で行われた IAML 国際大会への参加をきっかけとして執筆した。ポーランドは侵略、占領、分割、消滅された歴史を持ち、世界大戦中には人種差別を被った地域でもある。このような、いわば辛い過去を持った背景において、音楽に関する資料がどのように意識され、取り扱われているのかが今回の大会への関心であった。

1.2 大会開催の背景

ポーランドでの IAML 国際大会は 1966 年、2005 年に続いて 3 回目の開催であった。1955 年の IAML 加入以降、ポーランドは国立図書館や大学図書館、研究機関が中心となり、自国の古い音楽資料の収集と RISM への情報提供、保管を続けてきた。IAML 国際大会へのポーランド支部としての貢献と図書館員のスキル向上、活動の統一を目指して、過去 2 大会が行われたのに対し、本大会では音楽コレクションや作曲家の遺産、アーカイブズ (注) に焦点をあてながら、音楽遺産の保護と当国の音楽資料の調査に貢献することが目指された。

2. 発表

当大会はポーランドで最も古い大学ヤギェウォ大学 Uniwersytet Jagielloński の大講堂を会場として行われた。当大会に関する報告と発表要旨、各発表者が当日に用いた原稿の一部は IAML の

サイトで閲覧できるため、参照されたい。

以下では、筆者の関心に従って、当大会の所感を記すこととする。

2.1 Archives and Music Documentation Centres Section

IAML 組織内でアーカイブズの諸問題を検討しているアーカイブズとミュージック・ドキュメンテーション・センター部局 Branch of Archives and Music Documentation Centres は、例年通り各日発表者 3 名ずつ、2 回のセッションを受け持った。

2.1.1 Music archives and World War II

1 回目のセッションは、アーカイブズと第二次世界大戦がテーマであった。フレデリック・ショパン協会 Société Frédéric Chopin の設立者の一人であるフランスの音楽学者 Edouard Ganche (1880-1945) を取り上げた Renata Suchowiejko 氏は、Ganche のアーカイブズと彼が収集したショパンに関する資料がフランス、ドイツ、ポーランドと国境を跨いで所蔵されている現状に触れ、資料全体を認識する困難さと資料へのアクセスの課題を指摘した。

アメリカ合衆国ワシントン DC にあるホロコースト記念館 Holocaust Memorial Museum の Bret Werb 氏は、当館所蔵の Aleksander Kulisiewicz (1918-1982) 氏によるレコード・コレクションを取り上げ、これらの音楽に強制収容所での生活が描写されていることを紹介した。

IAML スペイン支部の Jon Bagüés 氏は、1936 年から 1939 年に勃発したスペイン内戦時の音楽資料に関して機関による調査活動をテーマとした。彼は内戦を避けて各地に移住した音楽家に関する資料や被災した音楽資料を補完するために更なる情報収集が必要であることに言及した。

2.1.2 Music archives in France and in Greece

2 回目のセッションのテーマは、フランスとギリシャのアーカイブズに関する取り組みであった。

フランス国立図書館 Bibliothèque nationale de France (以下、BnF) の Valère Etienne 氏は、当館におけるアーカイブズへの取り組みの一例を目録作成の点から紹介した。それによると、BnF は符号化アーカイブズ記述 Encoded Archival Description (EAD) をアーカイブズを目録記述に取り入れたことで、図書を中心とした従来の一般目録 Catalogue général とは別システムのアーカイブズと手稿資料のデータベース Base archives et manuscrits (以下、Base A&M) の運用が始まった。アーカイブズに適した目録記述が可能となったことで、BnF では当館の未整理資料問題も進展したという。なお、BnF では Base A&M と一般目録を使い分けつつも、Base A&M に登録したアーカイブズの情報を一般目録にリンクさせている点も特徴の一つである。

Stella Kourmpa 氏と Haris Xanthoudakis 氏はそれぞれ、アテネのコンセルヴァトワールに関する発表を行った。Kourmpa 氏が当校のアーカイブズの整理とデジタル化プロジェクトについて発表したのに対し、Xanthoudakis 氏は音楽文化史について当校のアーカイブズを用いて発表した。



会場 1 階の展示スペース

2.2 その他

上記以外にもアーカイブズに関連した活動の発表がいくつか行われたが、そのうち2件を紹介する。

IAMLの会長を務める Stanisław Hrabia氏はRILMポーランド支部の業務記録を用いて、ポーランドの音楽資料の収集と国内外における普及活動、さらに音楽図書館員の職業的發展などに貢献した人物を挙げながら、当支部の活動の歴史や状況の変遷を報告した。

南アフリカ共和国のケープタウン大学に在籍する Wilhelm Delport氏は、当校に保管されている Blanche Gerstman (1910-1973) と Priaux Rainier (1903-1986) のアーカイブズを取り上げた。彼はアパルトヘイト政策下において社会的にも当国の女性たちがより弱い立場にあったとしながらも、二人の活動が当国における西洋由来の音楽の発展に寄与したと価値づけた。

3. おわりに

筆者は、大会期間中にクラクフにある国立アーカイブズを個人的に訪れた。中庭に設置された歴史的資料を紹介するパネルの一枚に

« Without archives there is no past, and no future either... » という、アーカイブズに関心を持つ者なら誰しも魅力を感じる（と思われる）一文を見つけた。このように、ポーランドのアーカイブズは過去の出来事の証明と記録の証拠性を担保するものとして位置付けられているが、ポーランドの歴史的資料はその目録、建物問わず、占領時代に占領国に破壊されたことで、その大部分を失ったといわれている。ポーランドのアーカイブズの状況を説明するとき、「destruction」や「lack」、「reconstruction」といった用語が多用されるのはこのためだ。手元にある資料を対象とし、それ以外の資料を補足情報と捉える従来のアーカイブズ学理論では、ポーランドは自国の歴史を説明しきれない。ポーランドにとっ

ては他国が作成し、他国で保管されてきた資料でさえも、自国の歴史に不可欠な情報となりうるからだ。このことは、一つの資料が自国にとっても相手国にとっても歴史を証明するための大切な資料となることを意味するが、同時に他国の資料整理方法や開示条件にも左右される。

失ってしまった過去にも積極的に向き合い、互いに呼びかけあって、情報取得の必要性を説得するポーランドの状況には、過去を「既に終わったもの」や「本来のあるべき姿の象徴」としてすませてしまうのではなく、これからの活動の礎にしようとする意識の高さがあるのではないだろうか。クラクフ滞在中に感じた「自国への愛着心」は、過去の出来事とともに、これまで表立って取り上げられてこなかった人物や諸活動への配慮によって裏づけられているように思われた。

注

本稿では、「アーカイブズ Archives」を国際アーカイブズ評議会 International Council on Archives (ICA) の『多言語用語集』*Multilingual Archival Terminology*により、「組織や団体、個人の活動の中で作成され、受取られ、保存された資料全体」The whole of the documents made and received by a juridical or physical person or organization in the conduct of affairs, and preserved の意で用いる。

参考資料（最終閲覧日 2019 年 11 月 4 日）

大会公式サイト. <https://www.iaml.info/congresses/2019-krakow>
 Biernat, Andrzej. "The Destruction and Reconstruction of Archives: the Case of Poland" in *Archivum : revue internationale des archives*. (1996, 42, 147-155).
 Author and Ed. by Borkowski, Mateusz. *Music in Kraków: from the middle ages to the present day*. (Kraków: Krakowskie Biuro Festiwalowe, 2019).
 Ed. by Hrabia, Stanisław. *Polish Music Culture Resources in Libraries and Archives*. (Warsaw: Polish Librarians' Association, 2019).
 International Council on Archives. *Multilingual Archival Terminology*. <https://www.ica.org/en/online-resource-centre/multilingual-archival-terminology>
 Text by Michał Lewicki. *From Theoretical Treatises to Musical Masterpieces -- Musical Collections in the Jagiellonian Library through the Ages*. Catalogue of

exhibition at the Jagiellonian Library, Exhibition Hall, 12-26 July 2019. Project coordinator by Stanisław Hrabia]. Trans. by Jacek Partyka. (Kraków: Musica Iagellonica, 2019).

(なすさとこ)



クラクフからワルシャワへ向かう車窓から
(2019 年 7 月 19 日 著者撮影)

日本目録規則 2018 年版による 音楽資料書誌情報作成を考える

伊藤真理・鳥海恵司

(愛知淑徳大学・株式会社トッカータ)

1. はじめに

周知の通り、2018 年 12 月に『日本目録規則』2018 年版 (以下、NCR2018) が刊行された。国際図書館連盟 IFLA「書誌レコードの機能要件」(以下、FRBR) 研究が 1998 年に公表されて以降、欧米では典拠データ (FRAD)、主題典拠データ (FRSAD) を統合した Library Reference Model (以下、LRM) が作成された。このような書誌情報を巡る変化の中、日本でも FRBR に基づいた目録規則の改訂が行われた。

2018 年 3 月に予備版が公開されてから、NCR2018 版の特徴についての説明会も複数回実施されている。これまでの版との大きな違い

の一つに典拠形アクセスポイント (従来の標目) の設定があげられる。その一方で当該規則は、“自由度の高い規則” (注) と謳っている。これは従来通りの書誌レコード作成でも許容されるということの意味しているとのことである。目録委員会では、NCR2018 が普及することを期待していることは間違いないが、現場での混乱を少しでも緩和したいことの表れであろう。

さらに、当規則では Resource Access and Description (以下、RDA) と同様に、実際の目録業務でのエンコーディングを規定していない。実装に関しては、これからの運用の実態について様子を見ることになる。

音楽資料の場合、国外刊行物を頻繁に扱うことになるため、国外のメタデータとの互換性が重要なポイントとなる。そこで、われわれ音楽コミュニティでは NCR2018 とどう向き合えば良いのか、が大きな関心事となると思われる。IAML 日本支部は、2018 年 11 月と 2019 年 11 月に NCR2018 を取りあげて例会を開催した。こうした背景から、筆者らはクラクフ大会のポスター発表において、NCR2018 公開の紹介と、それに基づく音楽資料目録の実際を提示し、情報交流を図ることとした。

ポスター発表は、下記の通りである。なお本稿で記載するにあたり、ポスター発表の内容に補記した。

2. ポスター発表

2.1 発表の目的

日本では新しい目録規則である NCR2018 が公表された。本発表では、新たな当目録規則の概要を説明し、日本の音楽図書館コミュニティに対して、新しい目録環境への適応を促進したいと考えている。そのために本発表では、音楽図書館コミュニティにとって NCR2018 を使用することの問題点を明確にすること、および国際的な貢献のために取り組んでいかなければならないことを明らかにしたい。

2.2 NCR2018 とは

下記は、NCR2018 改訂プロジェクト活動の主なスケジュールである。

2010.9 改訂プロジェクト開始

2013.9 国立国会図書館が日本図書館協会に協力

2018.3 予備版を公開

2018.12 本版刊行 (2019.1PDF 版ウェブ公開)

2.3 NCR 2018 の策定方針について

NCR2018 の改訂方針は以下の通りである。これらについては、NCR2018「序説」に記されている。

- ・FRBR 概念モデルに基づき、国際的な目録基準に準拠すること

- ・RDA との互換性を保証すること

- ・RDA での属性の定義等を合わせる

- ・ただし、アクセスポイントの構築に関する規定の章の構成が異なる

- ・日本の団体名（政府関係機関、地方自治体）、天皇・皇族の名称、日本に関連する宗教についての典拠形アクセスポイントは RDA と異なる

- ・日本の刊行の慣習を尊重する

- ・NCR1987 版との継続性を保つ

- ・書誌階層構造について NCR1987 版の考え方を維持する

- ・各アクセスポイントに対して読み（かなとローマ字表記）をつける

- ・論理的で実践的であること

- ・ウェブ環境に適用可能であること

2.4 音楽資料にとっての NCR 2018

日本の音楽図書館等の団体で作成された書誌レコードに含まれる著作権者に対してアクセスコントロールを行っていくことが必要となる。日本では、学術機関の多くが利用しているエンコーディングシステムの関係から、基本記入を設定しない場合が多かった。今後は、著作に対する典拠形アクセスポイントの設定が強く求められることになり、音楽資料では必要とされる要素でもあるため、率先して実施することが期

待される。RDA との互換性を維持するには、特に国内の団体名の典拠形アクセスポイントについて検討する必要がある。

表現形、体現形を区別することからも、書誌レコードに演奏手段を正確に記録することになる。特に作品名から楽器編成が明らかではない作品を識別する上で有効であろう。日本音楽の例では、地唄は三味線もしくは三味線、琴、尺八で演奏する。海外のみならず日本の利用者にとっても、こうした情報が示されることになれば有益と思われる。補足するならば、トッカータでは、LCMPT (Medium of Performance Thesaurus for Music) に基づき日本語による演奏手段とジャンル／形式用語一覧を作成しており、既に実践面での対応が可能となっている。

さらに、楽譜資料について文字資料と同様の取り扱いをしている国立国会図書館での対応について再考していくことを検討する余地があれば、楽譜資料の種類やフォーマットをより正確に記述することが可能となる。RDA との互換性の面でも、表現形の属性である内容種別、体現形の属性であるメディア種別、キャリア種別を明示することとなり、同定が明確になる。

2.5 今後の課題

日本図書館協会目録委員会からは、未だ研修事業についての情報が無いが、今後積極的な研修実施が強く求められる。RDA が公開されたときには、様々な言語で多くの研修機会が設けられていたことを参考にすることができると考える。

今後は、LRM との整合性やリンクドオープンデータへの対応を検討する必要がある。Bibframe といったスキーマの検討など、何よりもまず実装に向けた努力が求められている。

3. おわりに

当日の発表では、ドイツ、スペインなどのカタログーたちと情報交換を行うことができた。欧州諸国では目録作成での RDA 適用が 5 年近く

渡邊隆弘.「『日本目録規則 2018 年版』の完成とこれから」平成 30 年度書誌調整連絡会議, 2019.2.28.
https://www.ndl.go.jp/jp/data/basic_policy/conference/bib_h30_resume1.pdf



ポスター発表風景

	Kineya, Rokuzemon, 1800-1858 = 香屋, 六左衛門, 1800-1858/1801, 1800-1858 香屋六左衛門 / 三洲屋文左衛門 / 四洲屋半七郎 五郎. — 原紙 90 頁 / 99枚表裏面 45枚
Type of record	楽譜 (楽譜) = notated music, printed <u></u>
Bibliographic level	モノグラフ <u></u>
Main title	源氏物語 / 三洲屋文左衛門 / 四洲屋半七郎 五郎
Content form:Media type	musico [notated] : unmediated = 楽譜 (楽譜) : モノグラフ
Edition	原訂紙 90 頁 / 99枚表裏面 45枚
Published/Produced	京楽楽譜館 : 株式会社京楽館, 平成 26 年 [2016]
Description	スコア 1 (9 ページ) ; 28 cm
Notes	原紙は本文としても利用されている (楽譜紙) 十代目 香屋六左衛門 作曲 原紙: 原紙 27(1952)年 1 月 25 日 原訂紙 90 頁: 平成 26(2016)年 9 月 15 日 クブラチュア (三洲屋文左衛門)
Instrumentation	singer (1) shamisen (1) [楽譜表裏面 2] [script] singer (1) shamisen (2) [楽譜表裏面 3] [script] singer = 香屋六左衛門 shamisen = 三洲屋文左衛門
Other titles	Tsurukame = 鶴亀 / 源氏 Nagata tsurukame 源氏物語 / 1379 元禄
Responsibility	Kineya, Rokuzemon, 1800-1858 = 香屋, 六左衛門, 1800-1858/1801, 1800-1858 Kineya, Yashichi, 1890-1942 = 香屋, 善七, 1890-1942/1941, 1890-1942 Hōgakuhe. Hachirōku = 99枚表 99枚裏 / 1379 元禄
Subjects/Genres	Nagata = 源氏 / 1379 Song with shamisen = 恋曲 (三洲屋文左衛門) / 1379 (1379 元禄) Song with shamisen (2) = 恋曲 (三洲屋 (2) 香屋) / 1379 (1379 元禄) Nagata = 源氏 / 1379 Source = スコア / 1379
Classification	DDC: 783.2/42 = 源氏と三洲屋文左衛門 / 1379 ト 1379 / 1379
Language	内容/テキスト: Japanese = 日本語 (jpn)
Country of publication	Japan = 日本 (jpn)
Content type	notated music
Media type	unmediated
Carrier type	volume
ISBN	978-4-8336-3305-5 : 9600
Other no.	3305 (楽譜紙)
ID	9784833633055

10

国際音楽資料情報協会 (IAML) 日本支部 2019 年臨時総会議事録

日時：2019 年 11 月 2 日 (土) 午後 1 時～2 時

会場：順天堂大学お茶の水キャンパス 国際教養学部第 2 教育棟 3 階 302 教室

出席 (18) 荒川恒子、石田康博、伊東辰彦、伊藤真理、加藤信哉、岸本宏子、久保田慶一、佐藤みどり、関根敏子、田島克実、藤堂雍子、鳥海恵司、平岩寧、宮崎晴代、柳澤健太郎、山本宗由、東京音楽大学付属図書館、株式会社トッカータ、明治学院大学図書館付属遠山一行記念日本近代音楽館

委任状提出 (35) 井上公子、植田栄子、小倉洋子、金井喜一郎、金澤正剛、加納マリ、工藤哲朗、久保絵里麻、佐古純子、佐々木勉、嶋田弘美、土田英三郎、那須聡子、野川夢美、長谷川由美子、林伸二郎、樋口美緒、樋口隆一、正木光江、美山良夫、村井範子、森立子、大和紘子、林淑姫、アカデミアミュージック (株)、エリザベト音楽大学附属図書館、大阪芸術大学図書館、国立音楽大学附属図書館、昭和音楽大学附属図書館、桐朋学園大学附属図書館、同朋大学・名古屋音楽大学図書館、名古屋芸術大学附属図書館、フェリス女学院大学附属図書館、民音音楽博物館音楽ライブラリー、武蔵野音楽大学図書館 (五十音順)

参考 会員総数 75 (個人会員 55、団体会員 20)

I 開会挨拶 支部長 伊東辰彦

II 議長選出 荒川 恒子氏

III 総会成立の確認

出席者 18 名、委任状提出 35 名、合計 53 名。
会員総数 75 の過半数に達し、総会成立。

IV 議題

(1) 事務局長役職活動停止について

2017 年度から事務局長に就任した藤堂雍子

氏について、IAML 本部の規約にある Code of Conduct に照らして、その職責に不適格であったことの事実説明を支部長である伊東より行った。当日は、同氏に対し事務局長役職活動停止とした理由とそれに至った経緯について、役員会から様々な証拠を提示して説明したが、その詳細な内容については、資料を出席者に配布し回覧した。

藤堂氏からは、それに対しての納得のいく弁明はなく、2018 年 7 月に役員会が同氏に対して書面で通達した「事務局長の役職活動停止」について、当日の出席者および委任状提出者の賛成多数で承認可決した。

なお、当日も支部長から申し上げて出席者のご承認をいただいたように、今回の議題は複数の関係者の人権に関わることであり、ここでは当日支部長が事実説明した内容の詳細については公開しないことを前提としたい。事実説明の項目は以下のとおりである。

1. 議事録の改ざんねつ造
2. 役員への誹謗中傷
3. 東京音楽大学附属図書館からの公式の苦情
4. 個人情報漏洩

これらの事実説明に対し、東京音楽大学付属図書館から「支部長の説明内容に相違ありません」という発言があった。IAML 日本支部の活動を順調に行うことが出来るよう、今後とも会員各位のご協力をお願いする次第である。

(2) その他

『カレントアウェアネス-E』(No.378 2019.10.24)に、「E2187 - IAML 日本支部 40 周年記念シンポジウム<報告>」(関西館電子図書館課・工藤哲朗)が掲載された、との報告があった。

V 議長解任

VI 閉会



プラハ国際大会および大会初参加者のための補助金

2020 年 IAML 国際大会は、7 月 19 (日) ～ 24 日 (金) にチェコプラハ市で開催されます。これに合わせて日本支部では、国際大会にはじめて参加する個人会員 (図書館等職員並びに非常勤講師等の研究者) および団体会員の各機関所属メンバーに対し、補助金制度を設けており、現在募集中です。応募締切は 4 月 30 日。詳細は、支部まで電子メール (iamljp@j07.itscom.net) でお問合せください。

また、IAML 本部でも 2 つの旅費補助基金があります。〆切りは 1 月 31 日です。詳細は本部ウェブサイトをご参照ください。(参照 <https://www.iaml.info/congresses/2020-prague>)

「特集:地域に根ざした音楽資料の保存」

『びぶろす』85・86 合併号に、表記の特集が組まれています。詳細は、国立国会図書館『びぶろす-Biblos』のページをご参照ください。(参照 https://www.ndl.go.jp/jp/publication/biblos/index.html?fbclid=IwAR0Pg2WQt_qU2l6voQHFw8_G5HcZMGfs6001nI2dfRWnfvOB89E_1EhVaPM)

『資料組織化研究 -e』 終刊

整理技術の専門誌として『Technical Services』というタイトルで創刊された後、2008 年 11 月からは電子ジャーナルとして 55 年間刊行されてきましたが、74 号を持って終刊とすることが決定されました。(参照 <http://techser.info/wp-content/uploads/2019/11/74-201911-hen.pdf>)

ELCIELO と「audiobook.jp」 との連携

主に公共図書館向けに利用されている京セラコミュニケーションシステム(株)ELCIELO と audiobook.jp が連携して、オーディオブック配信サービスが 2020 年 2 月から開始されます。このサービスでは、" 利用者が図書館に行かずに PC やスマートフォンで図書館サイトからオーディオブックを検索し、視聴できるようになり、オーディオブックを利用することができ" ます。(参照 <https://current.ndl.go.jp/node/39487>)

会費納入のお願い

11 月に会費納入の書類を送付させていただきました。支部運営のため、できるだけ早い納入にご協力を賜りますようお願い申し上げます。お問合せは、会計・宮崎までお願いいたします。(haruyo12@imail.plala.or.jp)

正誤表

第 66 号の記載に下記の誤りがありました。訂正してお詫び申し上げます。

p.2 左欄 18 行 (誤) 会長 (正) 前会長
p.5 右欄 20 行 (誤) Harold (正) Harald
p.8 右欄 18 行 (誤) Jahrdunderts
(正) Jahrhunderts
(編集部)

Newsletter — 国際音楽資料情報協会日本支部
第 67 号

2019 年 12 月 10 日発行

国際音楽資料情報協会 (IAML) 日本支部
〒4801197 愛知県長久手市片平 2-9
愛知淑徳大学人間情報学部伊藤真理研究室気付
<http://www.iaml.jp>